

汁亦更釀之。如此八度是爲純酷之酒也。謂之鹽者以其汁八度絞返故也。今世亦謂一度便爲一鹽也。謂之折者以其八度折返故也。是古老之說也。而先師不用此酒。二日二夜而熟耳。

〔古事記傳九〕八鹽折之酒ヤシホラノサケ書紀に八醞酒と書り、醞は釀酒也とも久釀也とも、字書に注せり、又和名抄に、説文云、酎三重釀酒也漢語抄云、豆久利西京雜記云、正旦作酒、八月成、名曰酎酒、一名九醞

とあり、さて此を夜志本袁理と云所由は、私記に、或説、一度釀熟、絞取其汁、棄其糟、更用其酒爲汁、亦更釀之、如此八度、是爲純酷之酒也。略○中と云り、此説大かに宜しかるべし、八度折返とは古何

事にまれ回復て物するを折と云るにや、物語文に折返し歌ふなどあり。略○註又酒折池酒折宮など云もあるを思へば、折は酒を造るに殊に云言なるべし、さて新撰字鏡に、醜志保留とあり、

醜は、醜俗字と見ゆ、さて釀は、説文に厚酒也と注せり、此に依らば、厚酒を造るを志保留とは云るにや、志保留は即志保留の切まりたる言にて、幾度も折返し釀意なるべし、さて物を絞ると云も、此より出たること、又物色を染る度數を、一しほ二しほと云

も、本同意にて、其は、さて志本とは、物を染るにも其汁を云名にやあらむ、  
〔箋注倭名類聚抄藥四〕按古事記、有八鹽折酒、八鹽折是彌入折之假借、彌訓夜、與謂花單瓣爲比登

倍、謂重瓣爲夜閉、又謂張帆進船者、別張小帆、令船倍捷疾爲夜保之夜、同彌謂重疊也、與西土數字上聲、義同、入訓之保、與謂物染入爲之牟、同語、訓染爲會牟、亦一聲之轉也、今俗有比登之保之語、猶言

升一等也、又紅楓有彌入千入之稱、猶爾雅一染謂之縑、再染謂之縑、三染謂之縑之染、考工記三入爲纁、五入爲緋、七入爲緇、之入、折猶疊也、謂反復之、是彌入折、即數遍重疊反復之義也、與數回鍛鍊

之刀謂之八鹽折刀同、則知彌入折酒、即李時珍所謂阿刺吉酒燒酒、今俗粟盛酒皆是、嘗聞造燒酒粟盛酒之法、蒸釀酒未漉者、酒糟蓋之、取其所鬱蒸汁、先得其汁少許、投之、今所蒸之酒中、再蓋之、又

取蒸汁少許、投之所蒸酒中、如是三五次、所取蒸汁、即燒酒、是彌入折之義也、然則八鹽折酒、非再下麴醞釀者、神代紀用八醞酒爲彌入折酒者、西土古無燒酒、至胡元時始得其法、故無可以充之字、以